

オマーン再訪

マングローブ・プロジェクト以来 AAIN でオマーン国を扱うのは久しぶりとなるが、今回短期間ではあるが訪問する機会を得たので、再びオマーンを取り上げたい。1989 年の初回訪問時は隣国のアラブ首長国連邦から陸路オマーン入りして車で自由に移動できたので、海岸線から内陸部まで様々なオアシス地帯を見学することができた。特に山間の小さなオアシスでは、ナツメヤシ 1 本 1 本に対してきめ細かな手入れが行き届いている様子に感動したことを覚えている。木の根元には家畜糞が丁寧に施され、灌漑のために作られた水盤や水路の維持管理も行き届いているように観察された。そのため、ナツメヤシ園そのものがひとつの美しい景観として目に焼き付いている。また、オマーン人農家が自ら木に登って枝打ちをしており、外国人労働者にはほとんど頼っていないことにも驚かされた。2 回目の訪問は 1997 年で、この時は我が社の社員が全員マスカットに集合するという極めて珍しい状況でのオマーン訪問であった。その際の議論を通して出来上がったマスカット基金は、今でも我が社の NGO 的な活動の実施に活用されている。3 回目は 2003 年にマングローブ植林の開発調査に GIS の専門家として参加し、当時の地方自治環境水資源省 GIS 部門のスタッフと一緒に充実した日々を送ったことを思い出す。GIS 部門にはパロチスタン出身者やザンジバル出身者が混在しており、部屋の中ではアラビア語に加えてウルドゥー語やスワヒリ語が飛び交っていた。ドバイやケニア・タンザニアでの滞在経験が長い私にとって、なんだかとても居心地の良い部屋だった。マトゥラの港でダウ船を眺め、スークの中を歩きまわれば、インドからザンジバルに至る交易の歴史を五感で感じることができるのも、オマーンの良さのひとつになっている。

今回は 2 月から 3 月にかけての 1 ヶ月程の滞在であったが、年間で最も良い季節を楽しむことが出来た。過去 3 回の訪問では行く機会に恵まれなかったジャバルアクダルにも行くことが出来た。ジャバルアクダルを翻訳すると「緑の山」という意味で、乾燥した山岳地帯に忽然と現れる緑の段々畑を目の当たりにしてその名前の持つ意味を実感することができた。今回の滞在中に JICA の研修員 OB で組織する同窓会が催された。研修員 OB、大使館関係者、JICA 関係者あわせて 20~30 人程度の参加者であったが、魅力的なプログラムが準備されていた。小さなマリナに集合すると、まずは日本紹介ビデオとオマーン紹介ビデオが上映された。オマーン紹介ビデオは観光省が作成したものであり、沙漠の自然や海の自然といったオマーンが強調されていた。ビデオ鑑賞後 1 時間半程のクルージングに出るが、ビーチリゾートを海側から眺めたり、底がガラス張りになった特別船に乗り換えてサンゴ礁の生態を観察したり、最後は少し沖に出てドルフィン・ウォッチングを楽しむというものだった。まさに、ビデオで紹介された内容の一部を現実に体験することとなった。その後、マリナに戻ってみんなで昼食をとりながら情報交換をするという、コンパクトながら中身の濃い同窓会だった。

オマーンは私にとって大好きな国の一つであるが、今回の訪問で益々好きになったように感じる。それは、オマーン人が自らの力で国を発展させて行こうとする意気込みを、いたる所で実感することが出来るからだと思う。この国は ODA 卒業を間近に控え、その後はイコールパートナーとしての協力関係に移行していくことになる。国際耕種としては、これまでに培ってきた協力関係や人脈も生かしつつ、ポスト ODA 時代にふさわしい協力活動の実施に少しでも貢献したいと考えている。

(大沼洋康)



観光客で賑わうマトゥラの港とスーク



内陸部ニズワのオアシス



ジャバルアクダルの段々畑

花見に想う - グループからチームへ

春、花見の季節。国際耕種では、毎年筑波の海外研修員や社外の人たちを招待して、満開の桜の下でバーベキュー・パーティーを行うことが恒例となっている。この花見では、バーベキューの準備や実施、あと片づけ等々、研修員たちが分担し、できるだけ彼等自身が主体的に進められるように、指導員としても何時もの実習とは違った関わり方を心掛けている。

研修員の主体性と言っても彼等にとっては初めての事なので、何をどうするの、何から用意するの等、集まったグループメンバーは暫く食材を眺め自国の肉とどう違うなどガヤガヤやっているだけで準備は進まない。道具や皿の準備や定番のトマトとタマネギみじん切りサラダの作り方、キムチ味のキャベツサラダに実習で使ったステンレスボールを用いる事や肉の味付けにビニール袋を用いたりすることなどをちょっとやって見せ、後はよろしくと言って彼等に任せるようにしている。

彼等は『野菜栽培研修コース』に参加している一つのグループである。このような単なる人の集まりである「グループ」に対して、「チーム」は共同で仕事や作業をする人の集まり、とすることができる。「チーム」としての共通目標のもと

に、それぞれのチームメンバーの役割が設定され、それぞれがその役割を果たすことによって、目標が達成される。そうした達成感の共有はチームメンバー間の信頼と結束力を強化することにもつながる。

とは言うものの、もともとそんなだいそれたことを考えてバーベキューを始めたわけでもない。本来、きれいな桜をながめながら、みんなで楽しく食べたり飲んだりできれば、という季節の楽しみである。しかし、こうしたバーベキューのような共同作業を一緒にやるのが、「グループ」から「チーム」へ、そして互いに協力し助け合って一つのことを達成する「共創」の考え方につながる。さらには、バーベキューをよりよくするための「段取り(準備)」の重要性を学ぶ機会にもなる。多分に後付けの考えではあるが、なかなか核心をついているのかもしれない。

またバーベキューを通して、各研修員の素顔や、意外なキャラクターがわかってくることもある。10ヶ月間におよぶ長丁場の『野菜栽培研修コース』では、こうしたバーベキューの機会は何回かあるが、こうしたイベントが相互理解やよりよいチーム作りにつながれば、仕掛け人としてもうれしい限りである。

満開の桜の下で集合写真



踊る研修員達



あなた焼く人、
わたし食べる人…



アフリカの稲作 < 第 3 回 >

ウガンダの陸稲栽培

ウガンダの稲作は、主に東部の低湿地帯における水稲作であり、100 年ほどの歴史があるといわれている。現在、天水・灌漑を合わせて70,000haの水田がある。一方、陸稲栽培の歴史は新しく、作付けもごく限られたものであったが、ネリカ品種の導入とともに、急速に栽培面積が増えており、2002 年の 1,500ha から 2008 年には 40,000ha に達したといわれている。高まるコメ需要を満たすためには灌漑水田の開発が有効であるが、建設コストのほかにも環境保護の観点から湿地の開発に対して厳しい規制があるなど課題が多い。そうした中で、環境に配慮した小規模な灌漑水田の開発とともに、陸稲栽培の普及が果たす役割が大きいと期待されている。陸稲栽培は多くの農家にとって、新しい技術であるが、一部の湿地でしか栽培できないと考えられていたコメを畑地でも生産できるということで、農家からも注目されている。昨年、ウガンダ「ネリカ米振興計画」短期専門家業務に従事し、陸稲農家の栽培技術の現状を調査する機会を得た。今回は、その知見をもとに、陸稲の栽培技術をウガンダの農家がどのように受け入れているのかを紹介する。

本調査は、カンパラ近郊に所在する国立作物資源研究所周辺の農家を対象に行った。調査対象地は緩やかな丘陵地であり、多くの農家は丘陵の斜面ではなく、谷の低い位置にある比較的平坦な土地に陸稲を栽培していた。そうした場所は、地下水位が高く、有機物が蓄積し肥沃度も高いことが期待されるため、陸稲栽培に適している。プロジェクトのカウンターパートなどの指導を受けた先進農家が陸稲を栽培しているのを見て興味を持ち、種子をその農家から購入して栽培を始めた農家も多く、1 年未満の経験しかない農家がほとんどであった。品種としては、NERICA4 を栽培している農家がほとんどであった。栽培面積は 0.1ha 程度の小規模な栽培が多かったが、最も大きい農家では 1.7ha を栽培していた。



写真1. 丘陵地の谷間に位置する農家の陸稲圃場

陸稲の在来栽培技術は存在しないと言えるため、栽培の基本的知識も先進農家を通じて得ており、プロジェクトの栽培指針に沿った栽培の実践が見られた。陸稲栽培では、除草が収量向上の大きなポイントであり、この除草作業を容易にするために重要なのが条播き栽培であるが、調査した農家すべてが条播をしていただけでなく、周辺農家の圃場でも条播している状況が観察できた。条間は 25cm から 40cm 程度であり、プロジェクトの推奨する 30cm に近かった。除草作業もすべての農家が、栽培期間中に 3 回実施するということであり、これもプロジェクトの栽培指針に沿った実践であった。

このようにプロジェクトが推奨している技術がよく浸透している一方で、既存作物の技術を陸稲に適用している例も見られた。収穫のための鎌が普及しておらず、面積の大きい農家では、鉋で稲刈りをし、面積の小さい農家では穂刈りで収穫するのが一般的であった。脱穀は、ほとんどが穂を棒などで叩く方法であった。この方法で脱穀するには、穂刈りした収穫物は邪魔な藁がないため便利であるとのことであった。また、調査した地域はもともと稲作地帯ではないため精米所が存在しない。精米するためには、籾を近隣の町の精米所に持って行く必要があるが、自家用にはトウモロコシの製粉に用いる臼と杵を用いて脱穀する農家もいた。その他にも野菜との二毛作や陸稲とトウモロコシの間作など、稲単作がほとんどの水稲とは違う栽培体系を見ることができた。さらに、栽培技術とは直接関係ないが、藁を圃場近くの小屋を葺くのに用いている光景も見ることができ、陸稲がこの地域住民の生活文化の中に浸透していることを感じた。

しかしながら、ウガンダの陸稲作は始まったばかりであり、農家による栽培技術の工夫が加えられつつも、今後、陸稲栽培定着のためには、鎌や脱穀機による栽培技術の効率化や、精米所の普及などによるマーケットへのアクセス改善が重要である。また、病害虫の発生など面積の拡大に伴い新たに発生することが懸念される問題にも注意を払う必要があるであろう。



写真2. 杵と臼 写真3. 稲藁で葺かれた小屋

普及ニーズの明確化と普及活動に役立つ研修の実施～JICA 筑波における事例から

国際耕種では、2005 年から集団研修「野菜栽培技術 II」コースを5年間実施し、2010年から集団研修「小農支援野菜栽培技術」コースを担当している。研修事業の活動項目にアクションプランが追加され中核人材育成から人材育成普及型の研修コースに変化するなか、普及指導を効率化するために普及指導活動計画の策定が求められてきている。今回は、こうした最近の動きをふまえ、JICA 筑波で実施している本邦研修と帰国後の研修員の現場を“つなぐ”ためのさまざまな手順や工夫について紹介したい。

研修員は来日前に作成したインセプションレポート(初期計画書)で提起された課題・問題点を念頭に講義で学び、個別実験や共通実験・実習で理論を体得し、実例を見学・研修旅行で確認する。インセプションレポートの段階では不明瞭だった問題の輪郭が問題分析の講義やワークショップ、そして研修指導者との個別面接を経て次第に明確になり、各研修員の個別実験課題が決定する。個別実験がはじまるとフィールドディ、中間発表会、結果検討会を実施してアクションプランへの道標としている。実験・実習の結果は、テクニカルレポート(技術報告書)にまとめ、担当業務改善のためのアクションプラン(活動計画書)を作成する。個別実験の過程で知れた情報・知識や技術、当コースから学んだ事項を反映しているかどうか。そして、帰国後実際に現地で適用可能なものかを念入りに確認しながらアクションプラン案を作成していく。こうした修正を加えることで、帰国直前のアクションプラン案発表では各自の日常業務で実施可能な活動に絞り込まれている。新規導入技術の評価試験などのアクションプラン案では現地に適応した材料や手法で評価するので3年間ほどの再現実験計画が必要である。研修員の業務上の性格から、アクションプラン案が圃場で農家を取り込んだ栽培試験(on farm experiment)になることがおおい。実験計画で重要な「要因とレベル」については、現地の自然環境、資材調達、社会状況などの諸条件を充分考慮して作成しなければいけない。できあがったアクションプラン案は11月の帰国後各研修員の所属組織内において共有されることを目指している。

このように、研修と現場をつなぐ工夫の一環として、研修員自身が職務内で実践できる活動項目を落とし込んだアクションプラン案作成の改善にわれわれは主として取り組

んできた。今年はさらに研修員により深い理解をうながすために、インセプションレポート発表において帰国時にどのような活動をしたいのか披露させ、研修期間中に再確認を仕向けようとおもう。毎週提出させている Weekly evaluation sheet(様式)に研修中に知れた「帰国後の現場に適用・応用できそうな項目」をくわえ、毎月それを取りまとめて各研修員へフィードバックすることで、アクションプランの内容を充実させていきたい。

また、上述のような普及指導活動の計画化の工夫に加えて、フィールドディの活動についてもさらに改善を施したいとおもっている。今までフィールドディは実験の途中経過発表程度のものでしかなかったが、研修員が普及指導に必要な内容や情報を的確かつ効率的に伝達する普及指導手段の演習の場として明確に位置づけたいと考えている。そうすることでより現地での実践の場面を意識した研修になることを期待している。

研修コースにおける作業の流れ

	トピックス	時期	概要とねらい	
本邦研修	インセプションレポートの見直し	来日～2月下旬	活動地域の野菜栽培に関する自然環境・主要野菜・作型・販売等の現状。小規模農家の抱える野菜栽培に関する問題と原因。研修員自身・所属組織の課題。	
	問題分析と目的分析	3月上旬	インセプションレポートを基にした問題分析と目的分析。中心問題にかかる直接原因とその対応策案。この対応策が研修後半に作成するアクションプランのActivity。日本の有用技術の自国への応用検討。	
	解決技術の検討	3月上旬	個別実験課題についての指導者・外部講師など研修関係者の知見の活用。適切な課題の選択。	
	実験計画作成、実験の実施	3月下旬～4月上旬	実現可能なアクションプランの技術的裏付けとなる実験課題・目的・材料・手法。発表を基に研修指導者・研修指導員の助言の活用。	
	フィールドディ	6月下旬	選択課題の個別実験の進捗状況を発表し、研修員全員の理解と技術的気付きを促す。	
	実験結果検討会	9月中旬	結果から因果関係の理解を研修員全員で検討し情報を共有。帰国後に実験の再評価をおこなう時の材料や手法の検討。	
	実験結果発表	10月上旬	内容の理解と帰国後の再実験の際に検討すべき評価指標の確認。	
	実験レポート作成	10月中旬～11月	アクションプランを支える技術的裏付けとなる内容。	
	アクションプラン	たたき台(案)作成	9月下旬	自国小規模農家における野菜栽培の課題に対応した日本の有用技術、技術の普及、研修当初に考えた対応策、個別実験や見学等で見出した事項の検討。日常業務で実践可能なもの。
		たたき台(案)発表	10月中旬	指導者・外部講師など関係者の活用。具体性の向上。
本邦アクションプラン発表		10月下旬	課題として抽出された問題、技術の現地適応化。実践的で日常業務でできる技術の普及。	
事後プログラム	ファイナルレポート	帰国後2ヶ月以内	アクションプランを所属組織で報告、検討、修正。	
		帰国後1年以内	修正した計画の調査・研究・実験などによる技術確立の開始。セミナー、ワークショップなどでの情報伝達。	
		帰国後3年以内	通常業務内での実証試験の結果の分析・考察。技術確立の評価、普及。	